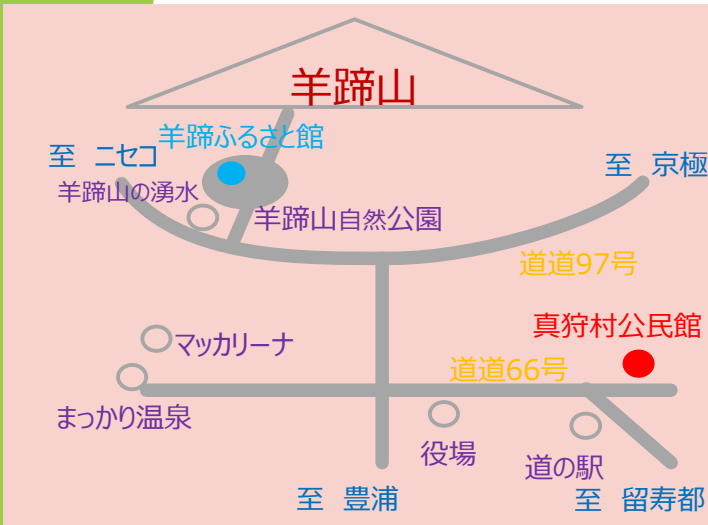


ご案内



■所在地 〒048-1605 虻田郡真狩村字光4番地
真狩村公民館

交通アクセス所在地

- 自家用車
 - ・札幌からは国道230号線（中山峠経由）で1時間半～2時間程度
 - ・千歳からは道道16号線と国道276号線（美笛峠経由）で1時間半程度
- 公共交通機関
 - ・JR俱知安駅から留寿都方面道南バスに乗り、「真狩公民館」バス下車
 - ・札幌からは洞爺方面行のバスを「留寿都」で下車し、俱知安方面行きのバスに乗り換え、「真狩公民館」バス下車
 - ・「真狩公民館」バス停から徒歩約3分

問合せ先

〒048-1611
虻田郡真狩村字光4番地
真狩村公民館内

真狩村教育委員会 社会教育係
TEL 0136-45-3336 FAX 0136-45-3338

ポチの案内(解説)書

名前	ポチ
性別	雌
犬種	アイヌ犬
生年月日 (拾われた日)	明治43年(1910年)夏初め、月日は不詳
身長・体重	高さ 40cm、長さ 70cm、体重 四貫二百匁(約16kg)
出生地 (拾われた場所)	北海道真狩村 トマト畑の脇で拾われた。
飼い主	村上政太郎(むらかみ せいたろう) 真狩村郵便局勤務(1917年(大正6年)に郵便局長就任) 1918年(大正7年)1月16日支給電報配達中に殉職 ※政太郎さんが亡くなった後、息子正男さんが局長となる 飼主期間:約7年 拾われた日～大正8年(1919年)5月初
命日	昭和2年(1927年)12月4日没(年齢17歳)

忠犬ポチの物語

公民館の玄関に入ると、真正面にはいくつかのガラスケースが並んでいます。その一つに、小さな白い犬の剥製があります。人々の心を励まし続けたその犬の名は「アイヌ犬ポチ」。現在はあまりにも小さく、愛らしい姿ではありませんが、かつて日本のほとんどの家に電話がなく、電報がもっとも早い伝達の手法であった中、暴風雨や吹雪、おいはぎで命を落とす郵便屋さんがとても多かった時代のエピソードです。

真狩郵便局の局長さんが、自ら愛犬ポチを連れ、一里余り離れた知来別まで配達に出かけました。しかし途中で猛吹雪に合い、倒れてしまった局長さんを必死で守ろうと猛吹雪と戦い、村の人に知らせようと郵便局や自宅まで戻り、足に血がにじむほど扉にぶつかり危機を知らせようとしたポチ。猛吹雪の音で打ち消され、誰にも気づいてもらえず、再び、主人の元へ戻り、一晩中主人を温め続けましたが、残念ながら翌朝、局長さんは亡くなられた状態で発見されたという実話です。この果敢で忠義を尽くす姿は、村の人々の歴史として後世まで語り継がれ、現在、ポチの剥製は、村の文化財として公民館に展示されています。

ポチの余生は、「札幌報恩学園」でアイドル的な存在となり、子どもたちを見守り続け、17歳、人間でいう100才のおばあちゃんになるまで生命を全うしましたが、昭和2年12月4日、7年半を過ごした学園の子どもたちに見守られながら、眠るように天国へ旅立っていきました。郵便局長さんを命がけて守り、学園の子ども達に生きる勇気を与えてくれたポチをなんとか残すことはできないかと、ポチを剥製として残すことになりました。そのことを知った当時の通信総合博物館の館長さんが、「ポチは郵便の歴史に残る、素晴らしい犬です。ぜひとも博物館に展示して、広く日本全国の人に、こんな苦勞の時代があったことを知ってもらいたい」と東京の通信総合博物館に展示されることになりました。

それから月日が経ち、ポチとの対面を楽しみにしていた真狩高校生たちが修学旅行で東京を訪れ、「この名犬は雪が大好きだった。真狩村につれて来るべきだよ。」とみんなの意見がまとまりました。念願が叶い、ポチはなんと70年ぶりにふるさとに帰って来たのです。

ふるさとの雪が「ポチ、帰っておいで」と呼び寄せたのかもしれないと、いくつかの本となって、今も公民館の図書館に置かれています。ぜひ、お読みになっていただければ感動もひとしおです。

＜真狩村 羊蹄ふるさと館＞ 忠犬ポチのご案内



今、ポチは剥製になって、
真狩公民館に展示されてるヨ!

会いに来てくださいね。
待ってま〜す。



ゆり姉が伝える昔あった本当の話

【忠犬ポチ物語】

①



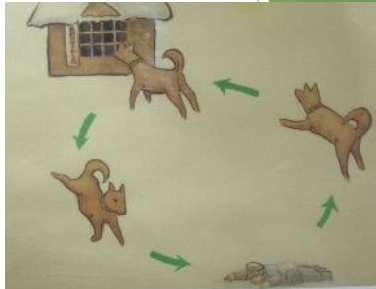
① 北海道のマカリだけのふもとの真狩別郵便局にポチという犬がいました。局長の村上政太郎さんの犬で、7才、赤毛の「めす犬」、たいへん利口でした。「ポチ、電報を配達に行くよ、一緒においで、局長さんは、ポチを連れて、出かけた。配達先は4キロも離れた所です。」

⑤



⑤ 「ポチは局長さんのそばに、びたり寄りついてました。あたためようと思ったのです。守ろうと思っただけです。しばらくすると、ポチはどひおきて家へ走り出しました。」

⑨



⑨ 郵便局の人はもう眠ってました。ポチは気が狂ったように、ほえ続けました。誰も起きてはきません。ポチは、また局長さんのところへ……

②



② 雪の積道を、局長さんとポチは歩いて行きました。人の足あとと、犬の足あとがからまるようにつきます。「ポチ、急ごう、お天気があやしくなりました。ふぶきにならなからしれない。」

⑥



⑥ 「ポチが、いくらほえても、家の人は出てきません。戸を叩く爪で、ひいたり、家の周りをほえながら走りまわりました。でも、誰も気がとくれません。ポチは、悲しそうに、クワンとなくとまた、局長さんのところに走ってしまいました。」

⑩



⑩ 次の日の朝、配達先の村に局長さんが泊まっていたことを知った郵便局の人は、あわてました。村の人を集めて、深い雪の中を探しに出かけました。

③



③ 電報を届けた帰り道、猛烈な吹雪になりました。みるみるうちに雪が降りつもります。局長さんは、ハート吉で歩きました。

⑦



⑦ 「犬のほえる声が、聞こえるような気がしました。『ポチじゃないかな……』まさか、この吹雪の中をポチだけが歩けないよ」と、話し合っていました。

⑪



⑪ 「あ、ポチ、ポチがいるぞ！」ポチは、その声にきいて、さっと起き上がり、局長さんのそばに座り、顔をなめはじめました。村上局長さんは、実家のために、死んでしまったのです。「ポチ……おまえは、局長さんを守っていたんだね……」局長が目に涙をためていました。ポチは全力を尽くして、自分の主人を守ろうとしたのでした。今から、84年前の話です。

④



④ 家まであと一キロほどのところに、来ると雪は、腰のあたりまで積もりました。足をとられて、歩くのに、とてもかかります。局長さんは、疲れと寒さで倒れてしまいました。

⑧



⑧ 「ポチは、局長さんをずっと探して、起こそうとしましたが、だめでした。ちよとの間、考えついたポチは、いさんに、郵便局まで、走り出しました。そのころ、郵便局では、こんな話を聞いていました。『局長さんは、この吹雪が帰ってこないよ。』向こうに泊めてもらっているだろうね。」

ポチ、頑張ったネ、えらかったネ。

